

<b>Title</b>	『メリット』(コルネイユ作)と狂気：バロックと演劇(IV)
<b>Author</b>	藤井, 康生
<b>Citation</b>	人文研究. 27 卷 6 号, p.309-323.
<b>Issue Date</b>	1975
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## 『メリット』(コルネイユ作)と狂気

## ——バロックと演劇(IV)——

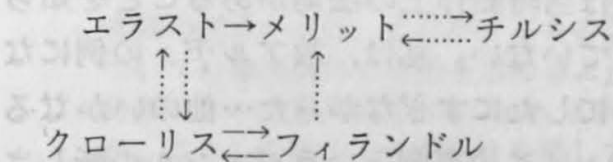
藤井康生

1. 喜劇『メリット』<sup>(1)</sup>の世界

「偽の手紙」という副題をもつ、コルネイユの処女作『メリット』が初演されたのは、1629年の暮と推定されている。この作品のなかでエラストという人物が陥る〈狂気〉は、当時の田園劇あるいは悲喜劇の流行テーマであった。1628年のロトルーの悲喜劇『憂うつ症患者』、1629年のピシューの悲喜劇『カルデニオの狂気』などは、『メリット』以前に書かれた、このテーマに関する代表的な例である。コルネイユは、後に『メリット』についての「再検討」のなかで、次のように述べている。

「この戯曲は私の試作であった。私は当時劇作上の法則があることを知らなかったので、この作品は法則を守っていない。私は、故アルディの例にならって、わずかばかりの常識をたよりにしたにすぎなかった…他のいかなる言語によっても書かれたためしのない、この喜劇というジャンルの新しさと、人品卑しからぬ人々の会話を写し取っている素直な文体とが、当時あれほどの評判をとった驚くべき成功の原因であったことに疑いはない。そのときまでは喜劇がおどけた人物なしに観客を笑わすのを見た人はいなかったのである…エラストの狂気はあまりすぐれた資質とはいえない。私はそのときからそれを心のなかで非難していた。しかしそれは必ず観客を楽しませることのできる演劇的装飾であり、しばしば驚きの目で見られていたので、私はその大いなる錯乱を易々と受け入れ、そこから私が当時まだすばらしいと思っていた効果を引き出したのであった。すなわちそれは、エラストがフィランドルをミーノースと取り違えて、彼に対して行ったペテンと彼をおとしいれた錯誤とを彼に知らせる手法のことである。私は、それ以後書いたすべての作品に比べて、事件を解決する上でこれほど適切なものに出会ったことがないなどとは考えていない。」<sup>(2)</sup>

この「再検討」が出た1660年という年代は古典主義美学が最盛期を迎えようとしていた時期であり、コルネイユの言葉もその影響を無視して素直に受け取るわけにはいかない。何故ならば、ここで彼が弁解しながら述べている、〈法則を守らず、狂気を大団円へ導くための手段とする新しい喜劇〉が、すでにわれわれが考察してきたバロック劇の代表的ジャンルである〈悲喜劇〉の構造に類似していることは明らかであり、彼はこの分野において本領を發揮していたからである（前回の拙稿を参照）。彼が否定的に見ている〈狂気〉の手法についても、M. フーコーが述べているように（『狂気の歴史』）、本来死以外に出口のないはずの〈狂気〉が演劇においては〈見せかけ〉と結びついて劇作上の一技巧に解消されてしまったところに17世紀初頭の演劇の重要な特徴があることは確かであるが、この〈狂気〉をイニシエーションとの関係において見るとき、われわれはその積極的な意義を見出すことになるだろう。この問題については第2章で詳しく検討するつもりである。そこで、まず、わが国ではほとんど知られていないコルネイユの処女作『メリット』の内容を、バロック劇の重要な要素である〈見せかけ〉効果に重点をおきながら、詳しく紹介することにしよう。参考のため、次に、主要人物の愛情関係図を掲げておこう。



(矢印は愛情の方向を示し、点線は劇中における心変わりによるものである)

### 第一幕

(一場)、エラストが友人のチルシスに恋の悩みを訴えている。エラストは、恋する女性メリットから軽蔑されているのだが、彼女に心を奪われ、彼女の魅力によって理性は盲目となっている。それほど彼女のまなざしは彼に強く作用しているのだ。チルシスは、エラストの真面目な訴えをからかい、「あれほどはかない美しい顔の輝きに惚れて、永遠の伴侶の選択を決めるなどとは信じがたいことだ」と言う。

Je crois malaisément que tes affections,  
Sur l'éclat d' un beau teint qu' on voit si périssable,  
Règlent d' une moitié le choix invariable. (V.V. 44~46)

エラストは、彼女の美しさは並大抵のものではないのだと言って、彼女を弁護するが、チルシスは、女というものはいかように選んでみても半年もたてばそれが気紛れだったことが分るし、結婚それ自体が墓場に等しいほど重荷であり、一人の女性と永遠に結ばれ子供のために魂の休息を失うなどまっぴらだと言った後、「ああ、何と人は理もなくこのような束縛を愛することか!」とため息をつく。

Ah! qu' on aime ce joug avec peu de raison! (V. 104)

そこでエラストは、遅かれ早かれ人は恋に炎を燃やすものなのだから、いかに自由人たらんとしても、いつかは結婚のことを考えるようになるだろう、と言り返す。するとチルシスは、そうであっても自分は顔と結婚するようなことはしない、財産の豊かさこそが夫婦愛の強力な絆なのだ、外観の美しさは心を温めても台所を温めてはくれない、と言った後、「そのような狂った恋をして結婚しても、甘い生活はわずか数日、その後には多くのいやな日々が続くのだ。長い愛情には全く保証がなく、ほとんど永続きしない信頼の上に成りたっているものなのだ」と言って自分の主張をまげない。

Et l'hymen qui succède à ces folles amours,

Après quelques douceurs, a bien de mauvais jours.

Une amitié si longue est fort mal assurée

Dessus des fondements de si peu de durée. (V.V. 119~122)

そして、あの美しいまなざしを見たら、そんな考えは維持できなくなるだろうと言うエラストに対し、チルシスは、「理性はどんな場合にも等しく強力なものなのだ」と答える。

La raison en tous lieux est également forte. (V. 129)

エラストは、もうこうなってはメリットに直接会わせる以外にないと考え、あれほどの輝やかな美しいさに出会ったら、「ぼくが気違いになるのも、それだけの理由が十分ある」ことを認めざるをえなくなるだろう、と言う。

Que je suis un fou, j'ai bien raison de l'être. (v. 134)

しかしチルシスは、「彼女がいかに美しくとも、真理からぼくをそらせるわけはいくまい」と答える。

Allons, et tu verras que toute sa beauté

Ne saura me tourner contre la vérité. (V.V. 135~136)

この場面においてはチルシスが永遠不変の真理に与する理性的な人間として描かれていることに注意しておく必要がある。(二場)、二人の前にメリッ

トが姿を見せる。エラストは、チルシスとの口論の決着を彼女に頼み、彼女に対する恋心の正当性を訴えるが、メリットは、自分は愛を受け取った覚えも、誰かに与えた覚えもない、エラストが勝手に想像して苦しんでいるのであって、そんなに悲痛な心をもっているのならそんなに晴れやかな顔をしていられるものではない、と言う。エラストが、「あなたの魅力的なお姿が私の苦しみを一時中断させ、私の顔はあなたのお顔の色を借りているのです」と言う、と、彼女は、「お前の恋の病いと恋の炎を消すために、いっそのこと私の魂の冷たさを借りるがよい」と言ってエラストを軽くあしらう。二人のやりとりを聞いていたチルシスは、空しい努力をするよりも、自分の天命をさとるべきだと言ってエラストをたしなめ、メリットに対しては「これからはもっと優しい気持をおもちになって、あなたに恋の炎を燃やす人に対してあまり冷たくなさらないで下さい」と言う。メリットは、「それが<恋>を敵とする人が私に言う言葉ですか!」と言って怒り、「そのような忠告はご自分で実行なさいませ」と答える。するとチルシスは「あなたの魅力を前にして私は自分の誤ちを知ったのです」と告白する。メリットは、すぐに前言を取り消すなどお笑い種だと言ひ残して、退場する。(三場)、エラストが、「さあ、ぼくは間違いかね? 非難に価するかね? あの人のことをどう思うんだい? ぼくの恋の炎をどう思うんだい?」とすかさずチルシスにつめよると、チルシスは、「彼女は誰も正常ではいられなくなるような不思議な魅力(je ne sais quoi)をもっている…チルシス以外のものなら彼女に仕えるために死もいとわぬであろう」と答える。エラストは、「彼女に心を奪われたことを卒直に告白しろ」とチルシスに言いよる。するとチルシスは、「あれだけの魅力に出会った以上、一篇の詩も作らないとは約束できないよ」と答え、「君が消せない、あの恋の火を一篇のソネのなかに描いてみせてやろう」と言う。「それはむしろ君自身の気持ではないのか」とエラスト。「そのような罪がぼくの心のなかに一時でも入りこんだら、天罰を受けてもよい」とチルシス。「その言葉を覚えておこう」とエラスト。こうして二人は別れる。(四場)、チルシスの妹のクロリスとその恋人であるフィランドルが永遠の愛を確かめあっている。(五場)、そこへチルシスがやってくる。チルシスは、「不思議なもの」を見たと言って、気が転倒している。彼は、妹からその女性の名前をきかれても、秘密だ、と言って立去ってしまう。クロリスは兄の後を追おうとするが、フィランドルに引きとめられる。

## 第二幕

(一場), エラストの独白。エラストが予想したとおり、チルススはメリットの視線を避けることができず、今やエラストに会うことさえ避けている。チルススとメリットは逢引きを重ね、今日もメリットはチルススを待っている。エラストは復讐するようと自分に言いきかす。(二場), エラストは、メリットが一人で見ているのを見て、「あなたに愛情のたけを語ってきかせる絶好の機会をこんなふうは無駄にするなんて、あの新しい恋人はもうあなたをお見限りなんですね」と皮肉を言う。メリットが「あの方の心にはそのようなお気持ちが全くないことは、あなたもご存知のはずです」と答えるので、エラストは「でも、彼は、あなたに会って以来、心にそのときの甘い思い出を抱き、あなたとお話することだけが楽しみとの評判でございますよ」と言う。するとメリットは、チルススがいかに恋愛に対して冷静であるかを述べ、チルススの悪口を言うエラストを軽蔑する。(三場), エラストの独白。エラストは、二年間思いを寄せてきたメリットから軽蔑され、さらに彼女が裏切者のチルススに好意をもっていることを知り、二人に復讐するために、メリットの隣人を買収することを考える。(四場), チルススが自分の作ったソンの意見を妹のクローリスにきく。チルススは、メリットに対する激しい恋心が書かれているソンの読んできかせた後、「これはエラストの恋の炎を描いたのだ」と言う。しかしクローリスは、それがチルスス自身の気持であることを見破ってしまう。そこでチルススは、メリットに対する愛とエラストに対する友情のどちらを選ぶべきか思い悩む。クローリスは、エラストがいかに金持とはいえ二年間もメリットに嫌われているのだから心配はないと言って兄をなぐさめる。チルススは妹の言葉に安心してメリットの本心を確認めに行く。(五場), エラストは、メリットの隣人のクリトンに一通の手紙を渡し、それをフィランドルに届け、「この手紙にはメリットの恋心が認められています」と言うように頼む。するとフィランドルがやって来る気配なので、エラストは片隅に隠れる。(六場), クリトンがフィランドルを呼びとめ、メリットからの偽の手紙を読ませる。エラストは、肩ごしにその手紙を読んだふりをして現われ、「メリットがフィランドルを選び、エラストとチルススが争ってもむだだったことを彼が一人じめしているのは本当なのか」と言って、フィランドルをおだてる。さらにエラストは、メリットとクローリスを比較しながら、フィランドルがメリットへ傾くように言葉巧みにけしかける。フィランドルは、なかなかエラストの言葉にのらず、「そんな

くだらない理由では、ぼくの貞節を揺がすことは絶対にできないだろう」と言う。

Adieu : des raisons de si peu d' importance

Ne pourraient en un siècle ébranler ma constance.

(V.V. 643~644)

しかしクリトンに対しては「二時間後にもう一度会いにきてくれ」と言って立去る。エラストは、フィランドルが罠にかかったことを知り、チルシス兄妹を共に破滅させて二重の復讐ができたとうそぶく。(七場)、チルシスがエラストを呼びとめ、「約束のソネをあげよう」と言う。エラストがそのソネを読んでいる有様を部屋から見ているメリットはしっとにかられる。チルシスが「このソネを君の手であの人に贈るのが見たいのだ」と言うと、エラストは、そのソネを返し、急ぎの用があるので他にもっとよい使者を見つけてくれ、と言って立去る。(八場)、メリットが部屋から降りてきて、「あの友達と何をしていたのですか」ときくと、チルシスはエラストの奇妙な態度を説明する。メリットは、「恐らく彼は私を見て逃げたのでしょう」と言った後、チルシスに対する愛情を打明ける。チルシスは喜んで、「私の幸福はあなたに好かれることだけ」、「もし書面による誓約をお望みなら、あなたのために私の恋の炎を描いたこのソネが私の胸の奥底まであらわにしてくれるでしょう」と本心を明かす。するとメリットは、「そのソネはしまっておいて下さい。でもそれは、私のまなざしがあなたの心に及ぼした方の大切な証拠だと思っています」と言う。チルシスは有頂天になる。

### 第三幕

(一場)、フィランドルの独白。フィランドルは、偽の手紙に魅せられ、メリットへの心変りを決意する。(二場)、チルシスがフィランドルを呼びとめ、メリットの愛を勝ち得たことを得意げに話す。フィランドルがその証拠をたずねると、チルシスは、彼女の言葉しか受けとっていないが、彼女の約束だけで十分だ、と答える。そこでフィランドルは、遠まわしにチルシスの気を引きながら、メリットの偽の手紙を見せる。その手紙のなかにチルシス兄妹を嘲笑する個所があるのを知ったチルシスは、フィランドルに決闘を申し込む。フィランドルは、「ぼくの血はもはやぼくのものではないので、勝手に処分するわけにはいかないが、今晚メリットに暇乞いをすることにしよう」と言って立去る。(三場)、チルシスの独白。偽の手紙を信用したチルシ

スは、「偽りの外観」(la fausse apparence) や「まなざし」(les regards) を信じたことを後悔し、「ああ、外見すべてが欺瞞でしかないほどのペテンがまたとあったらどうか?」と思い悩む。

O ciel! vit-on jamais tant de supercherie,

Que tout l'extérieur ne fût que tromperie? (V.V. 895~896)

そして彼女と彼女の手紙のどちらを信じてよいのか分らなくなる。

Je ne sais plus qui croire ou d'elle ou de sa plume. (V. 908)

そして彼は、「かくも苛酷な苦痛がぼくを悩ませ、ぼくの胸を引裂くからには、かような苦悩をいだいて生きていることはもはやできない」と述べ、死を決意するが、彼女のために死んだとあっては不実な女をうぬぼれさせるので、誰にも分らないように死のうとする。(四場)、クローリスが兄を呼びとめる。彼女は兄の異様な様子を見て理由をきく。チルシスはフィランドルから受け取った手紙を渡す。彼女は、手紙を読んだ後、女というものは巧みに人をだます才にたけており、メリットだけが思いを寄せるに価する唯一の女性ではない、と言って兄をなぐさめる。そしてメリットはエラストの前にも何人もの男をだましており、チルシスを一週間もてあそび、今やフィランドルがその愛の対象になっているにすぎないので、やがて新しい恋人がフィランドルにとって代り、復讐をしてくれますよ、と言って兄にメリットをあきらめさせようとするが、チルシスは、死以外に救いはない、と言って立去る。(五場)、クローリスの独白。彼女は「浮気者が私を捨てるのなら、私も彼を捨ててやる」と言って、偽の手紙を冷静に受けとめ、その手紙を利用してメリットとフィランドルの不謹慎な心変りに復讐してやろうと考える。

(六場)、クローリスは、フィランドルを呼びとめ、偽の手紙をちらつかせながら、彼をからかう。フィランドルは、その覚えのある手紙を取り返そうとするが失敗し、チルシスと決闘して取り戻す、と言って立去る。

#### 第四幕

(第一場)、メリットの乳母が、チルシスよりも二倍以上も財産をもっているエラストに何故つれなくするのか、とメリットにたずねる。メリットは「財産には私を眩惑できない偽りの輝きがつきまどっているからです」と答える。

Il (le bien) suit un faux éclat qui ne peut m'éblouir. (V. 1130)

そして富の豊かさはしばしば人を悪徳へ導くと言うので、乳母は納得する。



そこへクローリスがやってくるので、乳母は退場する。(二場)、偽の手紙を信じているクローリスはメリットを責めたてる。しかし、メリットがフィランドルという人物には会ったこともないと言うので、クローリスは手紙を見せる。メリットが「この筆跡は私のものではありません」と言っても、クローリスはなかなか信用しない。そこへチルシスの友人のリジがやってくる。(三場)、リジは、クローリスに兄の死を知らせ、メリットに対しては「チルシスは、あなたの心変りが卑劣にも彼を侮辱しているのを知って激怒し、絶望のあまり私の家で亡くなりました」と言う。それを聞いてメリットは気を失う。驚いたクローリスは助けを呼ぶ。(四場)、クリトンとメリットの乳母がかけつけてくる。乳母は「メリットが死ぬ」と言って騒ぎ、リジとクリトンは「水だ」、「いや家へ運んだ方がよい」と言ってあわてふためき、クローリスは力がぬけてしまう。(五場)、エラストの独白。エラストは、自分の策略が成功し、メリットとチルシスが互いに恋人を失ったことを喜んでいる。(六場)、そこへクリトンがかけつけてきて、チルシスの死を知らせ、「メリットはチルシスの後を追いました」と言う。エラストは、自分の策略によって二人の人物が死んだことを後悔し、罪の意識にかられて気が狂い始める。彼は、生死を司る女神パルカがメリットを返してくれないのなら、自分も彼女の後を追おうとする。すると彼の身体はぐらつき、雷によって割られた大地の胎内に呑み込まれ、生きたまま冥府へ突きおとされる。彼はこの冥府にいるメリットとチルシスの足元に自分の血を流そうと考える。すると大地は大きな腹を開け、彼を三途の川のほとりまで連れていく。彼は、川に向って「チルシスは渡ったか？ メリットはここにいるのか？」とたわ言を言う。この冥府のイメージはすべてエラストの妄想である。エラストのただならぬ様子に驚いたクリトンが「どうなさったのですか？」とたずねると、エラストは、クリトンを三途の川の渡し守であるカロンと取り違え、「向う岸へ渡してくれ」と言って、彼の肩に飛びのる。クリトンはエラストを舞台裏へ連れ去る。(七場)、チルシスを探すフィランドル。(八場)、エラストは、冥府の女神であるエリーニュスたちから罪の追及を受け、彼女たちの亡霊と闘っている。エリーニュスたちとは、「一般に殺人、その他の罪の追及の女神」とされ、「普通には翼をもち、頭髮は蛇の恐ろしい形相で、手には炬火をもち、罪人を追い、狂わしめる」<sup>(a)</sup>とされている。フィランドルが、気の狂ったエラストを見て、その原因をたずねると、エラストは、フィランドルを冥府の裁判官であるミーノースと取り違え、すべてを告白する。

すなわち、チルシスが悶死し、メリットがその後を追い、クローリスが恋人を失ったことは真実だが、その責任は信じやすいフィランドルにあるのだと述べ、「あの手紙はすべてこの手で書いたのです」と告白する。事実を知ったフィランドルは、死よりもつらい後悔の念にさいなまれているエラストの命を奪う気になれず、錯乱状態におちいる。(九場)、エリーニュスたちの追及から逃れようとして闘うエラスト。(十場)、リジがクローリスにチルシスが活着していることを知らせる。リジは偽りの悲報 (*la triste feinte*) によって、メリットが憐憫の情にかられるかどうかためしてみたかったのだ。

### 第五幕

(一場)、クリトンがメリットの乳母にエラストの有様を語る。すると舞台裏から亡霊を追いかけるエラストの声が聞える。クリトンは逃げる。乳母は、「もし私がペルセポネー(冥府の王プルートーンの妻)に取り違えられるものなら、彼の狂気がどの程度のものか見てみたい」と言って、エラストを待ちかまえる。(二場)、エラストは、亡霊たちを追い払う有様を長々と語り、「せめて死ぬ前に、この暗いすみかのなかで、あの幸せな二人の亡霊に会いたいものだ」と述べ、剣に手をやってなおも闘かおうとする。そのとき彼は、乳母に気付くが、彼女をメリットと取り違えて「あなたの足元に命と子ども血を注ぐことだけが望みなのです」と言う。しかし乳母の説得もあって、あまりにも年をとっている彼女をよく見ているうちに、それが乳母自身であることを認める。乳母は、クリトンがメリットの気絶を死と取り違えたこと、チルシスの死が空想にすぎなかったことを知らせ、「この冥府、この闘いは、幻想にすぎないのですよ」と言う。

*Cet enfer, ces combats, ne sont qu'illusions.* (V. 1529)

エラストは、自分の錯覚をなかなか認めようとしませんが、乳母から冥界と現実との相違を指摘されて、ようやく納得し、「導き手を失った私のか弱い理性は、あなたを見失うと再び盲目になってしまいそうです」と言って、乳母を頼りに狂気から覚めていく。

*Et ma faible raison, de guide dépourvue,*

*Va de nouveau se perdre en te perdant de vue.*

(V.V. 1551~1552)

乳母は「私があなただのお役に立つのなら、かくも立派なお方のために骨おしみするつもりはありません」と答える。(三場)、フィランドルが自分の罪を

認め、いまわしい記憶を忘れるようにとクローリスに頼むが、クローリスは拒絶する。(四場)、チルシスは、メリットに愛の喜びを語るが、彼女が黙っているのです、その理由をたずねる。メリットは、「あなたは私の目に語りかけていますので、私の目があなたに答えています」と答える。

Tu parles à mes yeux, et mes yeux te répondent. (V. 1631)  
つまりメリットの目は心の動きを表わしているのである。

Tu t'en peux assurer; mes yeux, si pleins de flamme,  
Suivent l'instruction des mouvements de l'âme. (V.V. 1635~6)

(五場)、チルシスとメリットは、クローリスからフィランドルとの不和をきき、何とか二人を元の鞘におさめようとするが、クローリスは「約束を破って、あんなに突然心変りをしたからには、移り気には移り気を、軽蔑には軽蔑を」と言いつつ、フィランドルを許さない。(六場)、エラストがメリットに報復を願い出るが、メリットは、「あなたのペテンのおかげで私たちの愛は深まったのです」と言いつつ彼を許す。エラストの愛は、乳母の助言もあって、メリットが一番可愛がっている女性、すなわちクローリスへ向う。クローリスが、兄の同意を得て、エラストと結ばれることを暗示して幕となる。

## 2. 『メリット』と狂気

J.ルッセはコルネイユの喜劇について次のように述べている。「コルネイユのすべての喜劇は一つの中心的テーマをめぐって展開する。すなわち、移り気、《変化》である。浮き漂う魂、流動する精神、これらが絶え間なく往きかう光景を提供する。誠実なものも、不実なものも、誰もが変り、変ることを夢み、変るふりをする。

処女作『メリット』は、一連の心変りの物語である。

チルシスは、感傷的な不可知論からメリットへの貞節へと変る。

メリットはエラストからチルシスへ心移す。

フィランドルはクローリスからメリットへ心移す。

エラストはメリットからクローリスへと移る。

そしてメリットは多くの心変りを経験していた。」<sup>(4)</sup>

また、＜バロック＞に関する比較的新しい研究書『バロック的主人公の精神試論 (1580—1640)』のなかで、その著者J.-F.マイヤールは、上記のJ.ルッセの言葉をそのまま断ることなく引用して、コルネイユの初期作品

の特徴としている<sup>(5)</sup>。しかし、J. ルッセの見解は正確ではない。『メリット』のなかにはバロック劇の特徴の一つである〈心変り〉が描かれていることは確かであるが、バロック劇の構造を考える上で極めて重要な〈見せかけ〉(la feinte) 効果(前回までの拙稿を参照)に焦点をあててこの戯曲を見ると、フィランドルの〈心変り〉とその他の人物のそれとでは質的に異なっていることが分る。すなわち、チルシスとメリットの〈心変り〉は〈眩惑〉によるものであり、フィランドルのそれは「偽の手紙」という〈見せかけ〉によるものである。そしてエラストの〈心変り〉は、コルネイユ自身が「登場人物すべてを結婚させるという当時の慣習を満足させるために仕組んだ」<sup>(6)</sup>と述べていることからしても、〈心変り〉と言うにはあまりにも消極的に見える。さらに、単なる〈心変り〉だけをもって『メリット』のバロック的特徴とするならば、この戯曲において重要な役割を果たしているエラストの〈狂気〉はどう考えるべきかという疑問が生ずるのであろう。

ここでこの作品をもう一度振り返ってみることにしよう。まず第一幕において、エラストは登場したときからメリットの外観の輝きに眩惑されている。そのような永続性のない外観の犠牲にはなるまいと厳しく自戒していたチルシスも彼女の外観に眩惑されてしまう。フィランドルとクローリスは互いに眩惑し、眩惑され合っている。ここに見られる〈眩惑〉はすべてが事実であり、意図的な〈見せかけ〉効果によって惹き起されたものではない。しかし、このような一瞬のうちに行為される、宿命とも靈感とも言うべき〈眩惑〉にはそれが真実であることを保証するものが何もない。詩人であるチルシスはその靈感から一篇のソネットを書いたが、それも一方的な告白にすぎない。その〈眩惑〉が永続性をもつためには、〈真実〉と結びつく必要がある。J. スタロバンスキーによれば、「眩惑は無償で熱狂的な確信を強制するが、その確信はたちまちのうちに限界をむき出しにし、不信にとって代わられてしまう」<sup>(7)</sup>からである。エラストは、この不信を巧みに利用して策略(〈見せかけ〉)を弄したのである。しかし、このエラストの策略によってすべての人物が翻弄されることになるのは第三幕以後であって、第一幕はたとえチルシスの心変りが問題になるにせよ、それは意図的に仕組まれた〈見せかけ〉効果に原因があるのではない。従って、劇構造の上から見れば、第一幕は『メリット』の外枠であり、フィランドルが「偽の手紙」に騙されて〈心変り〉をする第三幕第一場からエラストの狂気が覚める第五幕第二場まではいわば〈劇中劇〉であり、第二幕はその〈劇中劇〉の準備過程と考える

ことができる。ここで〈劇中劇〉という言葉を用いる理由について説明しておく必要がある。まず、エラストの策略に翻弄される人物たちの演ずる行為はエラストによって仕組まれた劇であり、言いかえればエラストはその劇の作者であると同時にその成行を〈見る〉観客の位置をしめ、それを演ずる人物たちはエラストによって〈見られる〉役者の位置をしめることになり、ここに演劇の本質的要素である〈観客〉と〈役者〉という関係が成立する（このエラスト以外の人物たちの演ずる劇を劇中劇（A）と名付けておこう）。しかし、エラストの策略が二人の人物の死（実際には仮死）を惹き起したと分るとき、この両者の関係は逆転する。すなわち、エラストの策略は一応成功するのであるが、チルシスとメリットが実際に死んだと知らされたエラストは、彼らの死の原因が彼自ら仕かけた策略にあることを知って、後悔のあまり狂人となり、冥府へ下って亡霊たちと闘う一人芝居を演ずることになる。ここにおいて、それまで作者兼観客であったエラストは一人芝居を〈演ずる〉役者となり、彼に付き合う人物は、クリトンも、フィランドルも、乳母も、その一人芝居を〈見る〉観客の立場におかれることになる。つまり、劇中劇（A）のなかにもう一つの劇が仕組まれているのである（このエラストの一人芝居を劇中劇（B）と名付けておこう）。従って『メリット』は（A）（B）二重からなる〈劇中劇〉を含んでいることが分るだろう。復讐を企んだエラストは、自ら仕かけた策略（〈見せかけ〉）が惹き起した虚報（〈見せかけ〉）によって復讐されることになったのである。しかし、彼が受ける復讐は、彼の想像力が生み出す妄想の世界に現われる冥府の亡霊たちによるものである。つまり、劇中劇（A）のなかの劇中劇（B）はもはやエラスト個人の妄想のなかにしか存在しない。一人芝居たる所似である。彼の〈狂気〉はそのためのアリバイとなっている。このような〈狂気〉は、原因が虚報という〈見せかけ〉にある限り、〈真実〉が明らかにされることによってやがて解消することになる。J. スタロバンスキーも言うように、「コルネイユにおける幻覚は、人間の条件の病患でもなければ、真実に近づくことを妨げる形而上的な障害でもない。それは一時的な錯誤にすぎず、たちまちのうちに真実の輝きに屈する運命にある」<sup>(8)</sup>からである。乳母の〈光〉（真実）をたよりにしながら狂気の〈闇〉（錯誤）から抜け出すことによって、エラストの一人芝居（B）は終了する。そして彼が狂気に陥ったとき告白した〈真実〉が劇中劇（A）を解消させる。17世紀初頭の演劇に見られる、このような〈狂気〉の役割について、M. フーコーは次のように述べている。

「狂気は、十七世紀初頭の文学では、とりわけ媒介の位置をしめて、作品の大団円よりも山場を、切迫した結末よりも筋の急変を形づくる。こうして小説や演劇の作品構造の仕組のなかに移されてしまった狂気は、真理を表明したり理性を穏やかに復帰させる場合の口実の役目をはたす…狂気は演劇面でのそれ本来の真剣さをうばいとられてしまった。つまり、狂気が懲罪や絶望となるのは、錯誤の次元においてでしかないのである。その演劇上の役割は、見せかけのドラマにかかわる場合にしか存続しない」<sup>(9)</sup>と。

ではエラストの〈狂気〉は〈見せかけ〉の劇中劇(A)を解消させる役割しか担っていないのだろうか？それならば何故エラストは狂気の状態においてギリシャ神話の冥府の世界を正確にイメージ化できたのであろうか？また何故彼はチルスとメリットの死をきいて即座に冥府へ下って三途の川のほとりにいる自己を妄想したのであろうか？ここでわれわれは冥界降下による〈死の旅〉がイニシエーションの典型の一つであることを思い起す必要があるだろう。イニシエーションとは、エリアーデによれば、「加入者に〈再生〉を伴った儀礼的〈死〉を体験させ、その〈死〉と〈再生〉とによって、彼に〈新しい人〉という真の人格をとりもどさせること」<sup>(10)</sup>である。その死の試練の旅がしばしば迷宮によって象徴され、具体的には暗黒の冥府とか地母神の胎内への下降という形をとって表わされるのは、古代人にとって〈死〉とは〈光〉の喪失にすぎなかったからである<sup>(11)</sup>。そして、「あらゆるイニシエーションの最も顕著な局面は加入者が彼の属する氏族あるいは社会の原神話を演じ再体験するように要請されていること」<sup>(12)</sup>(S. ヴィエルヌ)にあり、精神分析的に言えば神話の世界は「根源的な心の一部を形作っている原始的な特性を保存している」夢あるいは狂気の無意識が「心が発展するにつれて離れていったすべての古いことがら——古代的思考など——を取り返そう」<sup>(13)</sup>(ユング)として呼び起したイメージであるとすれば、エラストの一人芝居は狂気の状態において彼が無意識的に受けたイニシエーションであると言えるだろう。さらに付け加えれば、そのエラストのイニシエーションにおける〈水〉の試練が彼の罪を浄化することになったのである(エラストは、クリトンカロンを取り違えて、彼の肩に飛びのって三途の川を渡った——バシュラールは〈水〉のエレメントのもつ〈死と穢れ〉に対する浄化の働きをカロンの神話的イメージのなかにとらえている<sup>(14)</sup>)。何故ならば、エリアーデが言うように「水に浸されるものは〈死に〉、それから水から再び起きあがり、子どものように罪も〈歴史〉もなくなり、新しい啓示を受け入れ、

新しく〈本来の〉生をはじめることができるようになる」<sup>(4)</sup>からである。つまり、エラストは、狂気の状態において無意識的に死の試練を受けて罪が浄化され、地母神ペルセポネーの役を担う乳母の〈光〉（知識）にすがって再生することによって（第五幕二場の二人の対話を参照）、狂気から抜け出すと同時に、メリットの眩惑からも覚醒したのである。それ故彼は新たにクロールリスを受け入れることができたのである。象徴的な死の試練を受けた人物は他にもいる。チルシスとメリットである。チルシスの苦悩による空想的な死がメリットの気絶を生んだ。気絶はイニシエーションにおける象徴的な死の試練の典型の一つである<sup>(5)</sup>。彼らは相関的な象徴的死の試練を受けて〈光〉（真実）を見い出したが故に、彼らの視線は相互的に眩惑し合うことになり（第五幕四場のメリットの言葉を参照）、かくして彼らの〈眩惑〉は〈真実〉と結びつき、互いに結ばれることになったのである。

『メリット』の副題でもある「偽の手紙」(la feinte) は、二重からなる〈劇中劇〉を生み出して「世界は舞台」というバロック的世界観を表出すると同時に、三人の主要人物に象徴的な死の試練を伴った〈闇〉から〈光〉への通過儀礼<sup>イニシエーション</sup>を受けさせて、彼らを新しい人格に再生させる働きを担っていたのである。そして、その〈劇中劇〉において重要な役割を果し、〈通過儀礼〉における人格の〈変容〉を可能にしたのが、自ら仕かけた「偽の手紙」の復讐を受けたエラストの〈狂気〉だったのである。

#### 注

- (1) テクストは Théâtre complet de Corneille (Garnier) Tome I を用いたが、Marty-Laveaux 版の Grands Ecrivains 叢書及び M.Roques と M.Lièvre による初版テキスト (1633年—T.L.F.) を参考にした。
- (2) Examen de 1660
- (3) 高津春繁著「ギリシヤ・ローマ神話辞典」(岩波書店)
- (4) J. Rousset: La littérature de l'âge baroque en France (José Corti, 1963), p. 205~6
- (5) J—F. Maillard: Essai sur l'esprit du héros baroque (1580—1640) (Nizet, 1973), p. 24
- (6) Examen de 1660
- (7) J. Starobinski: L'oeil vivant (Gallimard, 1961), p. 39
- (8) ibid., p. 41
- (9) M. フーコー著「狂気の歴史」(田村淑訳, 新潮社), P. 55
- (10) エリアーデ著作集第二巻「豊饒と再生」(久米博訳, せりか書房), p. 35
- (11) S. Vierne: Rite, Roman, Initiation (P. U. G., 1973), p. 41
- (12) ibid., p. 68

- (13) C. G. ユング著「人間と象徴—無意識の世界(上)」(河合隼雄監訳、河出書房新社), p. 149
- (14) G. Bachelard: *L'eau et les rêves* (José Corti, 1973), *chap. III—Le complexe de Caron. Le complexe d'Ophélie* を参照。
- (15) 同上エリアーデ著作集第二巻, p. 68
- (16) S. Vierne, *op. cit.*, p. 22